２０２１年１月院長挨拶更新

　あけましておめでとうございます。生まれ故郷の雪国は今年は豪雪のようですが、寒い日はあるものの熊本の陽光の中でのお正月は、本当に春が来たかのような希望を与えてくれます。表日本と裏日本のハンディを改めて感じざるを得ません。全国の天気予報をみて、新潟の雪マークの連なりを見るにつけ、その暗さと切なさに思いをはせています。今年は、熊本に来て２０年来、初めて八代で大晦日からの年越しを経験しました。これまで京都の家で紅白歌合戦をみて、近くの神社仏閣にお参りすることが多かったですが、今年は八代でじっとしていました。もっとも、これは怠惰なことでもあります。若い頃はずっと病院にいて、緊急対応をする代わりに看護師さんの控え室でテレビをみたり看護師さんのおせち料理的弁当のお相伴にあずかったりしていましたし、肝移植手術をするようになってからは、緊急手術や術後管理などで病院漬けになり正月もない時期をたくさん過ごしてきましたから、今の境遇は恵まれているというか、怠け者になったというか、まあ、年をとったということでしょうか。

　今年は、「静かな年末年始」が合い言葉で、多くの方が、ひっそりと新年を迎えられたのではないでしょうか。病院には６日間の外来休診はありましたが、救急外来は当直職員が交代で担当し、通常よりは減るとはいえご自宅に帰れない入院患者さんのケアはいつも通り行われました。そこに今年は、COVID-19が加わりました。外来での診療、検査と、保健所や県の入院調整本部からの依頼が毎日あり、入院患者の受け入れも続きました。熊本県も、他の多くの都道府県同様、感染者は増加傾向にあり、大きなクラスターも発生して、県内医療機関での入院受け入れはかなり厳しくなっています。それにつれて、休日返上で調整を続ける行政の疲弊や混乱も増しているように思います。相対的には軽症者が多いのですが、それでも原則入院かホテル療養になります。施設内での高齢者の集団感染のほか、家族感染が広がるにつれてこどもの陽性者/入院者も増えています。概ねその症状は軽いのですが、付き添いが必要な年齢では入院調整に工夫が必要になります。一家で罹患して、兄弟で陽性・陰性が別れると、入院中/自宅のこどものケアをそれぞれ誰がみるか現実的に大きな問題になります。一家皆さんでの自宅療養も選択肢になり得ますが、初発者からの感染の広がりを懸念されるかたも多く、これもそう簡単には一般化しにくい事情があります。おそらくは、私たちが子供の頃のような、部落単位のような小さなコミュニティーで生活が完結していればこんな事態にはなっていなかったでしょうし、対策ももっと取りやすかったのでしょう。

院内感染も各所で報道されています。もうどこで起こっても不思議でない、という状況で、当院でももし生じたらどうするか、いつも考えています。どの医療機関も感染の持ち込み防止には工夫を凝らしていますが、これもあまりに過度になると、感染者の差別偏見につながりかねません。医療従事者への差別や偏見、誹謗中傷はいまだに絶えないのですが、そろそろみんなが、トリアージ体制を確立した上で、「これはありふれた病気」、と割り切った診療体制にシフトし、基幹的な医療機関は中等症・重症患者さんに力を注ぐような環境整備にむけてコンセンサスができないものかと思っています。もちろん、２月末から始まるワクチン開始がそのきっかけになることを期待しています。再緊急事態宣言も取り沙汰されますが、生活継続の瀬戸際に追い込まれるようなかたが激増する懸念もあり、with Corona としての根本的な考え方の変換が必要な時期ではないかと思います。相当なリーダーシップが必要でしょうが。

病気は新型コロナウイルス感染症だけではありません。熊本労災病院がその真価を発揮するべき疾病は他にもたくさんあります。それができない状況はあってはなりません。みんなで助け合い、仕事を分かち合いながら進まなければなりません。一人の医療者ではどうにもできないことでも、多くの職種、世代を超えた多くの医療者の結集は、すごい力を発揮します。熊本労災病院は、そのような医療者の集団です。春の国家試験次第ですが、来年は定員一杯の８名の、希望に燃えた初期研修医も加わる予定です。労働者健康安全機構という公的な独立行政法人の枠組みの中ではありますが、地域における第一線の病院として、何ができるかを常に考え、ソフトハードに工夫を凝らしながら少しずつでも実行に移していきたいと、新年にあたり思いを新たにしました。現状に満足することなく、目先の状況によって大きくぶれること無く、将来を見据えてさらに地域のみなさんに信頼される医療機関であり続けるために今年も職員全員で努力いたします。本年もよろしくお願いいたします。